

数字の怖さ

数字は怖い。自民党が大敗した参院選を見て改めてそう思う。勝敗を決めた1人区、農家の怒りを買ったのは、4haの面積要件だった。政府与党が現在進めている農業改革では、4haで対象農家を絞ることになっている。なぜ4haなのか、4ha以上と以下では何が違うのか。農村を廻ってみるとこの数字に対する不満が常に会話の中に出てきた。

数字の怖さは、曖昧でぼんやりとしていたイメージを具体的で現実のものとして目の前に突きつけてくるところにある。国際競争力の強化という農業改革の方向にうなずくところはあっても、4haを満たしているかという自分の問題として突きつけられれば心穏やかでは無くなるのだろう。

全ての農家に所得を保障すると謳う民主党の政策が現実的だとは思わない。しかし「切り捨てか弱者救済か」とくれば、よろよろとくるのもまた人情で、それでも改革を進めるべきだと言えるほど人間は強くない。その結果、農村地区を多く抱える1人区では、自民党は6勝23敗と歴史的な大敗を喫した。行き所のない怒りが「一度、自民党を懲らしめんといかん」の気分となって投票へ向かったとも言える。今回の結果は分かりやすい対立点を掲げた民主党の巧さにあったといっても良いだろう。

4haだけではない。消えた年金「5000万件」に、不透明な事務所費。安倍政権にとって不都合な数字がどんどん出てきた。自民党にとって今回の選挙ほど数字に泣かされた選挙は無かっただろう。5000万件と言えば国民二人に一人である。しかも問題化する前にすでに安倍総理は知っていたというのであれば、国民の怒りは収まらない。自民党はある意味、数字に負けたといっても良いかもしれない。

この夏、もう一つの印象的な数字は平成18年度の食料自給率ではなかろうか。13年ぶりに40%を割り39%になった。天候不順で農作物の国内生産が減ったため、特に砂糖の生産が落ちたのが響いたと農林水産省では説明している。生

産量の少ない砂糖ではあるが、カロリーが高いため影響が大きいことは初めて知った。農水省の小林次官は「自給率の低下は重く見なければならぬ」と表明したが、これでは平成27年に45%を達成するという目標にはおぼつかない。

問題はこれが底なのか、それともさらに坂を転げ落ちる過程の一段階なのか、である。

実は40%割れという数字、細かく見てみると少し違う。小数点以下まで比べてみると、すでに8年ほど前には、39.8と40%を切っていて、四捨五入でかろうじてしがみついていたに過ぎない。踏みとどまっていたのでは無くて、とうに40%を切り、下落し続けているのである。これは明らかに説明不足ではないか。

自給率低下の原因として農水省は食生活の変化ばかりを取り上げるが、今回は生産要因である。自給率向上のための様々な政策が、効果を上げておらず、農水省の存在意義を問われかねない。いずれにしてもきちんと数字を追って、政策を検証する必要がある。

農業改革の対象要件であれ、食料自給率であれ、最近は分かりやすい説明が求められることもあって、数字を使うことが多くなった。ただ分かりやすいが故に誤解も生じやすい。数字が一人歩きする場合もある。重要なのはその数字の持つ意味をきちんと説明することだ。

かくいう私も、数字でどきりとしたことがある。去年、国内でのBSE感染牛の発見頭数は10頭で過去最高だった。数字だけを追いかけっていると、日本での感染も拡大しているように思える。ところが、去年はことのほか、老齢のホルスタインの処分が多かった。牛乳の過剰問題で、乳の出が悪くなった高齢牛の処分が増え、感染牛の発見機会が多くなったためだ。頭数の増加は感染の広がり示すものではなくて、牛乳の過剰問題が潜んでいたのである。数字だけ見れば危うく誤解してしまうところだった。本当に数字を扱うのは恐ろしい。

(日本放送協会(NHK)解説委員 合瀬宏毅・おおせひろき)